

現代に生きる良寛 —「遊び」や保育者のあり方を模索するために—

土 屋 文 明

(鹿児島短期大学)

はじめに

良寛と言えば、子ども達と手毬やかくれんぼをして遊んだ和尚として良く知られている。良寛は本当に子ども達と遊んだようである。しかもその遊びは、良寛も子ども達も互いにその楽しみを分かち合えるものであった。そしてその遊びにおいて、良寛と子ども達は、互いに対等の立場にあった。遊びにおけるこのような良寛と子ども達とのあり方は、私が目にする保育における保育者と子ども達とのあり方と、大分違うように私には思われる。

本発表の課題は、良寛の遊びの特徴と、その子ども達との関わりを明らかにすることである。

Ⅰ 良寛の遊び—無心に没頭すること—

私は或る講義のテストに、「一二三四五六七」という問題を出すのが常である。学生によっては問題の意味が分からない者もいると思う。「一二三四五六七」は、じつは、良寛の次のような詩の中にある一句である。(『日本の禅語録二十良寛』、245-246頁)

袖裏毬子直千金 謂言好手無等匹
可中意旨若相問 一二三四五六七

この詩の大意は、「わたしの袖の中にいつも入っている手毬は、何にも替えがたいもの。手毬つきで、わたしに敵う者は誰もいない。わたしがこのようにひがな一日手毬をする真意を誰か問うたとしても、ひいふうみいよういつむうななと手毬をつくしか、なす術はない。」、というようなことであろう。次の引用文は、問題「一二三四五六七」の解答例である。

《まりをつく、まりをつくつく、良寛さん、只、つく、つく、つく、子どもとつく、つく、つく。良寛は子どもと闘ったのだ。必死に、只闘ったのだ、まりつきで。決して教育的見地から子どもと遊んだのではない。ましてや遊ばせたという強制的なものではない。大人ではなく、子どもとして、全く全く平等に子どもの人格を認めて。無心の境地で、遊びに没頭した。世間の評判なんか何も気にしなかった。子どもと、ただ子どもと闘った。子どもになりきった。

そこには、道元さんとの出会いで悟ったものがあったのだ。只管打座＝身心脱落＝三昧境、そして最後には、「なりきる」ということである。無心・無我なら、

どんな物でも事でも、悟りとなるのだ。「どうしてまりをつくの」、こういうことは、子どもには聞かないものだ、聞く方がおかしいとすべての人が分かっている。大人の生活には目的がある。そんな事は、良寛には関係ない。只管打座、身心脱落、それによって得たものは、「子ども」、そして「子どもとの遊び」だったのだ。身心脱落とは体と心が自分から抜け落ちるということの意味する。「一二三四五六七」「一二三四五六七」、まりをつく、まりをつく、つく、つく。只這是。すべてをこの言葉が意味している。子どもの遊びというものを大きくあらし、また包んでいる。子どもの「遊び」とは、目的をもたないことに無心に没頭すること。目的など全く必要ない。闘う、対等の立場で闘う。無心に没頭する。すると、身心は脱落し、本当の子どもの心が、はっきりと見えてくるのだ。子どもと一体になった良寛は、「一二三四五六七」「一二三四五六七」「只管打座」「身心脱落」「身心脱落」「只這是」「一二三四五六七」「一二三四五六七」であったのだと思う。》

前以て準備した解答ではないので、文章が荒いし、論理的に書かれているともいえないかもしれない。しかし、引用文は詩のようでもあり、リズム感に溢れている。このこと自体がじつは解答そのものである。これについては下で触れる。引用文には良寛の遊びの特徴と、良寛の子ども達に対するあり方が良く書かれていると、私は思う。

良寛の遊びの特徴が表れていると思われる箇所を、引用文から拾い出してみよう。

(i)「無心に没頭すること。」

これは、良寛の遊びのすべてを物語っていると言える特徴である。良寛は手毬つきにおいて無心に没頭した。だから、「いい年をしてどうしてそのようにひがな一日手毬をするのか」と聞かれても、良寛は答える術を知らない。答えたくても答えられないのである。「一二三四五六七」と、毬つき歌を歌いながら、手毬をつくだけである。良寛が手毬に没頭する様子は、詩よりも歌でより味わうことができる。

「冬ごもり 春さり来れば 飯乞ふと 草の庵を 立ち出でて 里にい行けば 里子供 今を春べと たまばこの 道のちまたに 手毬つく われも交りて そ

の中に ひふみよいむな 汝がつけば わはうたひ
あが唱へば 汝はつく つきて唱ひて 霞立つ 永き
春日を 暮らしつるかも

霞立つ永き春日を子供らと手毬つきつゝ

この日暮らしつ」(『良寛全集下巻』、218-219頁)

この歌には、そして先の引用文には、リズムがある。ほかに気を取られていては、この歌のリズムは味わえないし、手毬つきも成立しない。このリズムこそ、無心に没頭することの証である。したがって、先の引用文は内容的に良寛の手毬について書かれていると同時に、引用文を書くこと自体が、良寛の手毬を体現しているとも言えるのである。

(ii)「目的をもたないことに無心に没頭すること。」

上でみたように、良寛の遊びは、「無心に没頭することである。」したがって、良寛が遊ぶことに何か目的があるわけではない。良寛には、遊ぶ合間に子ども達に仏の道を教えようという意思はもちろんなかった。また、子ども達と遊ぶことによって生活の糧が得られるわけでもなかった。大人社会の価値基準からすれば、非生産的なもの、それが良寛の遊びである。良寛の遊びは、遊ぶこと以外の理由や目的があって行われるのではない。「只管」(ただ)遊ぶのである。(子どもの遊びは、いつもこのようであるだろう。)

II 良寛の遊び—その子ども達との関わり方—

先の解答例から、良寛と子ども達との関わり方について書かれている箇所を、抜き出してみよう。

(i)「良寛は子どもと闘ったのだ。必死に、只闘ったのだ、まりつきで。」

遊ぶことにおいて、両者は同じ立場にある。「好手無等匹」と広言する良寛には、普通行われる、大人の子どもの対する手加減は、全く見られない。文字通り良寛は子ども達と「闘った」のである。「闘うこと」において、手加減の生じる余地はない。「闘うこと」において、良寛と子ども達は、同次元に位置した。またそれだからこそ、両者は共に遊んだとも言えるだろう。

(ii)「決して教育的見地から子どもと遊んだのではない。ましてや遊ばせたという強制的なものではない。」

その理由は、色々と想像することができるだろうが、とにかく良寛は、自分自身の為に子ども達と手毬をした。良寛には遊びを「指導する」という意識はなかった。ましてや、遊びを通して仏の道を諭すという意識は全くなかった。上でみたように、両者が同次元に位置するならば、「指導」や「諭すこと」はあり得ない。

良寛も子ども達もその自由意思で共に遊んだ。良寛が大人に依頼されて、子ども達と遊んだわけではない。また子ども達も、良寛と遊ばなければならない約束事は何もなかった。

(iii)「ただ子どもと闘った。子どもになりきった。」
「子どもと一体になった良寛は、『一二三四五六七』であった。」

「無心の境地で、遊びに没頭し」、「子どもと闘う」良寛は、引用文にあるように、「体と心が自分から抜け落ちる」「身心脱落」の状態にある。つまり、手毬つきをする良寛は、さながら一個の手毬であり、一人の子どもでもある。良寛すなわち手毬であり、手毬すなわち子どもであり、子どもすなわち良寛である。手毬をすることにおいて、良寛と子どもは手毬と一体化し、それによって、良寛は「子どもになりきつ」ている。ここに良寛の遊びの特異性、手毬つきにおける子どもに対する良寛の関わり方の特異性が見られる。

III 良寛の子ども理解

先の解答例から、良寛の子ども理解に関する箇所を抜き出してみよう。

「無心に没頭する。すると、心身は脱落し、本当の子どもの心が、はっきりと見えてくるのだ。」

上でみたように、手毬に没頭する良寛と子ども達は手毬に「なりきる」。なりきることににおいて、良寛と子ども達は一体化する。遊びの緊張や成就感やその喜びを、共に分かち合えた筈である。すなわち、互いに無心に打ち込む手毬という共通の場において、良寛と子ども達は互いに良く分かりあえた、私は思う。

おわりに

大人と子どもの区別なく一つの遊びに没頭する、それが、私の良寛の「遊び」理解である。このような「遊び」においては、良寛も子ども達も十分に充実感を味わったことだろうと思われる。私は、このような充実感を味わわせることが、保育になければならないと思っている。保育者の目から見て望ましいと思われる活動が、「遊び」の名のもとに無反省的に一方的に子ども達に押し付けられていないか。良寛が現代に生きるとすれば、そのことは、このような保育に対して無言の批判となるだろう。

参考論文・文献

拙稿「良寛の手毬つき考—子どもの『遊び』とそれへの関わりを考える手がかりとして—」(鹿児島短期大学研究紀要第39号、1987年3月)

入矢義高『日本の禅語録二十良寛』(講談社、昭和56年)
東郷豊治『良寛全集上下巻』(東京創元社、昭和59年)